

がある。ただし、現段階では大型の群と中型の群2つが存在するのか、それとも時期差を表すのかどうかについての判断は留保したい。ただ少なくとも大型の製品については古い段階に属するものと考えている。

② Ⅲ期 宮ヶ迫遺跡 (第16図)

対象資料は3点である。いずれも5cm以上の製品である。

③ Ⅳ期 前原和田遺跡XⅢ層 (第17図)

対象資料は5点である。いずれも5cm前後の製品である。長さの平均値は5.14cmである。

④ Ⅴ期 小原野遺跡 (第18図)

対象資料は15点である。長さは3～4.5cmの間にほぼ収まる。長さの平均値は3.6cmである。

⑤ Ⅴ期 帖地遺跡XⅢ層 (第19図)

対象資料は12点である。長さはややばらつきがあり、2cmから4.5cmの間に散在する。やや細身の傾向も見られる。長さの平均値は3.5cmである。

⑥ Ⅴ期 木場A-2遺跡 (第20図)

対象資料は13点である。長さはややばらつきがあるものの、概ね3～4cmの間に収まる。長さの平均値は3.2cmである。

⑦ Ⅵ期

第4章で述べたとおり、Ⅵ期まで三稜尖頭器が残るかどうかについては断定できない。参考までに、西ノ原B遺跡の三稜尖頭器については、長さ2.9cm、幅1.3cmである。

以上、筆者の従来の編年に当てはめて古い順から規格をみてきたが、規格において概ね3つのグループに分けられた。三稜尖頭器に関する規格を表す言葉の定義として、「小型」は2～4cm、「中型」は4～6cm、「大型」は6cm以上としておきたい。この定義に基づくと、Ⅲ期が大型、Ⅳ期が中型、Ⅴ期が小型という変遷が考えられ、三稜尖頭器については明確に小型化の傾向が見て取れることが証明されたといえる。(第30図)ただし、Ⅲ期の三稜尖頭器に大型に加え、小型、中型も存在するかどうかという点については課題が残った。今後の資料の充実を待って検討したい。

(2) 基部加工ナイフ形石器

① Ⅲ期 宮ヶ迫遺跡 (第21図)

対象資料は5点である。長さは6～10cmの間に収まる。

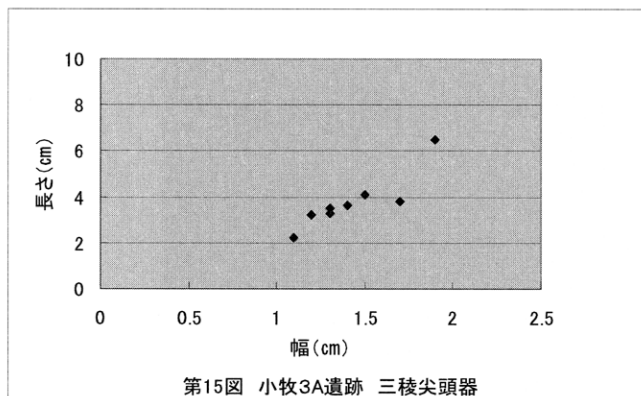
② Ⅳ期 西丸尾遺跡 (第22図)

対象資料は3点である。4～6cmに2点、約9cmが1点みられる。

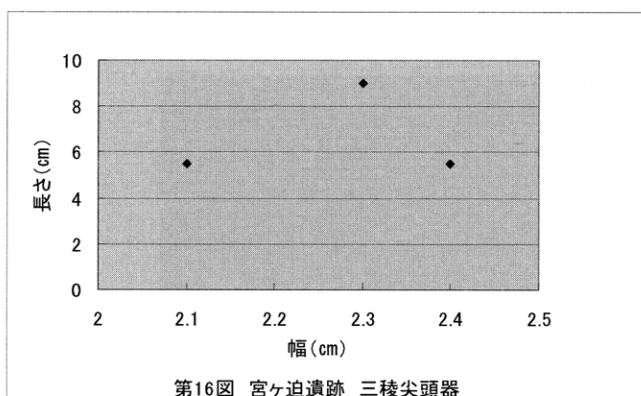
③ Ⅴ期 小原野遺跡 (第23図)

対象資料は23点である。幅にはばらつきがあるものの、長さは3～5cmの間にほぼ収まる。長さの平均値は約3.6cmである。

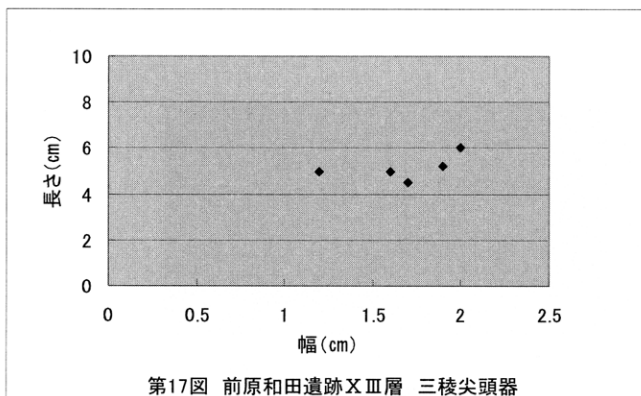
④ Ⅵ期 耳取遺跡 (第24図)



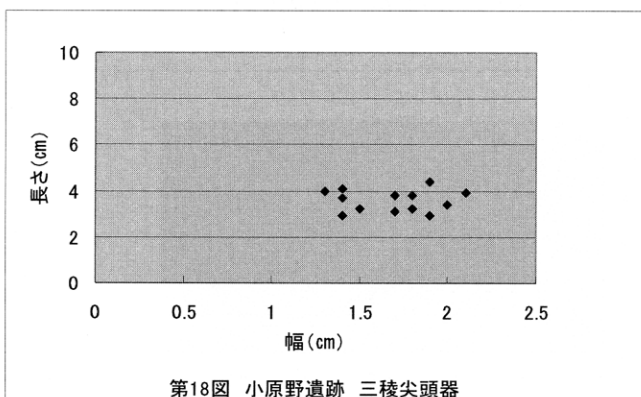
第15図 小牧3A遺跡 三稜尖頭器



第16図 宮ヶ迫遺跡 三稜尖頭器



第17図 前原和田遺跡XⅢ層 三稜尖頭器



第18図 小原野遺跡 三稜尖頭器